

小・中学生の音楽・体育教科に対する好意と印象について

About Goodwill and the Impression of Music Education
and Physical Education Subject in the Primary Schoolchild
and the Junior High School Student

多胡陽介

Tago Yousuke

要 旨

本研究は、小学5年生と中学2年生を対象に音楽・体育教科に対する好意と印象の程度を他の教科と比較して検討した。その結果、体育の好意は、小学生、中学生ともに全教科の中で最も高かった。また、音楽の好意は、小学生では低く、中学生では高い傾向であった。性別で見ると、小学生男子は、体育の好意が全教科の中で最も高く、音楽の好意は全教科の中で最も低かった。また中学女子は、音楽の好意が全教科の中で最も高かった。さらに、相対的に好意を比較すると、体育の好意は、男女とも小学生から中学生にかけて低くなり、音楽の好意は、男女とも小学生から中学生にかけて高くなる傾向であった。また体育と音楽の印象は、情緒的で肯定的な印象が強かった。これらの結果から、体育と音楽の好意は、性別により違いがあり、小学生から中学生にかけて変化することが示唆された。

Key Words：一対比較法，SD法，教科の好意，教科の印象

緒言と問題の設定

現在社会において「音楽」と「運動」は、人々の生活の中で最も関心の高い事柄の一つと考えられる。

「音楽」は、情動に作用し、自己のイメージや個性を表すための手段である。また音楽は商品を効果的に売るために使用されたり、医療、治療、教育等においてそれぞれの目的を達成するためにも利用されている。さらに近年の急

速なテクノロジー発達は、インターネットでの音楽配信などあらゆる形で音楽を利用可能にしている¹⁾。

「運動」は、近年増加している生活習慣病の改善・予防に有効であるので特に人々の関心を集めている。また運動を継続することは、体力の向上ストレスの緩和、高齢者の転倒予防にも効果を発揮する。また、コミュニケーションや自己実現の手段でもある。²⁾

この「音楽」と「運動」は、様々な形で融合されている。例えばエアロビックダンスやラジオ体操、リズム体操等である。音楽は、大脳皮質の運動中枢に影響を与え、身体運動を誘発させる³⁾。

今後、「音楽」と「運動」は、自己表現の手段や健康の増進といった目的でさらに重要な社会的役割を担っていくと考えられる。しかし、自己の趣向を確立させていく学齢期の子供達は、「音楽」と「運動」についてどのような印象を持っているのであろうか。特に教科としての「音楽」と「体育」についてどの程度の関心や印象を持っているのだろうか。松田は、小学生1～6年を対象に各教科の好意の順位を調査した。その結果、体育はすべての学年において最も好きな教科であった。また音楽の順位は、3番目から6番目の間であり、学年によって違いがみられた⁴⁾。さらに Benesse 教育研究開発センターは1990年から2006年にかけて小・中学生を対象に教科の好意を調査した。それによると、体育教科を「とても好き」「まあ好き」と答えた児童生徒の割合は、他の教科と比較して顕著に高かった。また音楽教科を「とても好き」「まあ好き」と答えた児童生徒の割合も、他の教科と比べて比較的高い傾向であった。また体育が好きな小学生男子の割合は、女子に比べて高かった。さらに音楽が好きな小学生女子の割合は、男子に比べて高かった。⁵⁾⁶⁾⁷⁾教科の印象については、野波らが小学生を対象にSD法を用いて教科イメージの調査を行っている。それによると小学生の各教科に対する情緒的イメージの分化の程度は、高学年になるにつれて次第に低下する傾向であった。また、音楽に対する情緒的イメージの分化の程度は、概して男児よりも女児の方が高い傾向であった。⁸⁾ また難波らは中学生を対象にSD法を用いて教

科イメージの調査を行っている。それによると、イメージの強さは1年から2年にかけて下降し、2年から3年にかけて上昇する傾向であった。また女子のイメージの変化は、各学年においてあまり差がみられなかった。さらに男子においては、音楽、美術のイメージの上昇が学年につれて強くなる傾向であった。⁹⁾

これらのことから児童生徒の体育と音楽に対する好意は、他教科と比べて高い傾向にあるといえる。また、体育と音楽に対する好意や印象は、性別により差があるというケースも報告されている。しかし、教科間の好意や印象を間隔尺度で比較した研究は見当たらない。間隔尺度で教科の好意や印象を比較する手法には、一対比較法やS D法が挙げられる。^{10) 11)} これらの手法を用いることにより、教科の好意や印象の程度の差をより明確にできる。そこで、本研究では、小学5年生と中学2年生を対象に一対比較法とS D法を用いて音楽と体育教科の好意や印象の程度を他の教科と比較して検討した。

研究の対象と方法

1. 研究の対象

対象者は、表1.に示すとおり彦根市内の小学校3校男子93名、女子88名、合計181名、彦根市内の中学校3校男子93名、女子98名、合計191名とした。また調査は、小学5年生、中学2年生の各校2クラスを対象とした。

表1. 調査対象者の内訳

	A小学校	B小学校	C小学校	小計	A中学校	B中学校	C中学校	小計	合計
男子	30	31	32	93	34	32	27	93	186
女子	27	29	32	88	32	33	33	98	186
合計	57	60	64	—	66	65	60	—	—
	181				191				372

2. 調査期間

調査期間は、平成19年11月から12月にかけて実施された。

3. 調査の方法

一対比較法とSD法を用いてアンケート調査を行った。実施するクラスの選定は、各学校において任意に選定された。実施については、クラス担任の教師によって行われた。なお回答の際には、友人と相談しないで回答するようクラス担任から指示がなされた。また調査は無記名とした。

(1) 対象教科

小学校では、道徳、特別活動、総合的な学習の時間を除く小学5年生の各教科（国語、算数、理科、社会、体育、音楽、家庭、図画工作）について実施した。

中学校では、道徳、特別活動、総合的な学習の時間を除く中学2年生の各教科（国語、数学、社会、理科、英語（外国語）、美術、保健体育（以下体育とする）、音楽、技術・家庭）について実施した。

(2) 一対比較法

一対比較法とは、 k 個の試料を比較しようとするとき k 個から2個ずつ取り出して対にして比較し、全体で ${}_k C_2$ 組の結果を総合して最終的に k 個全体の試料を評価する方法である。各対ごとに比較判断する方法には、単に両者の順位（優劣）のみを付ける場合と、順位を付けた上にさらに両者の差の程度を評点で示す場合がある。また、最終的な評価には、順位尺度を構成する場合、すなわち順位の優位性を問題にする場合と、間隔尺度又は比例尺度を構成する場合がある。順位の有意性を検定するには、一意性の係数 ζ 、一致性の係数 μ などによる検定法がある。距離尺度又は比例尺度を構成する方法には、サーストン、ブラッドレイ、シェッフェなどの一対比較法がある。^{10) 11)}

本研究ではサーストンの一対比較法を採択した。サーストンの一対比較法とは、数個の対象を一対比較による順位付けデータから間隔尺度を構成し、

数値線上に位置づける手法である。この方法を採用することにより、教科間の好意の程度を間隔尺度で比較することができる。アンケートについては順序効果が生じないように各教科の配置をできるだけランダムにして行った。得られたデータは、サーストンの方法のケースⅠからケースⅤの中で最も実用的に適用しやすいケースⅤを用いて尺度化を行った。^{10) 11)} なお、欠損値のある被験者のデータについては、除外して集計を行った。

(3) S D法

S D法 (Semantic Differential Technique) とは Osgood らによって開発され、印象やイメージの測定として最も用いられる方法である。刺激として提示される概念について、いくつかの対極になる形容詞対 (意味尺度) に対して 5～7 段階程度の段階的評定を行い対象の印象を分析する方法である。¹²⁾

評定尺度となる形容詞対の選定には、Osgood らが発表している評価、潜在性、活動性の次元の中から教科のイメージを測るのに有効と思われる形容詞対をそれぞれ 4 対、計 12 対選定した。選定した形容詞対は図 1. に示した。選定された形容詞対については、小学生にも理解できるよう筆者によってわかりやすく翻訳された。

これらの 12 対の形容詞について「とても～」 「やや～」 「どちらともいえない」 「やや～」 「とても～」 の 5 段階で評定させた。さらに 5 段階の評定について 1～5 の評定値を与えた。図 2. にはアンケート調査の例を示している。形容詞対においては、ポジティブな形容詞とネガティブな形容詞が左右どちらかに偏らないようにできるだけランダムに配置を行った。また全教科に対して回答させた場合、回答数が非常に多くなるため正確なデータを得ることは困難であると考えられる。そこで 1 クラスにつき 4～5 教科に振り分けて調査を行った。なお欠損値のあるデータについては、中央値を代入して集計を行った。

評価の次元	light (明るい)	dark (暗い)
	pleasurable (楽しい)	painful (苦しい)
	positive (やる気のある)	negative (やる気のない)
	optimistic (嬉しい)	pessimistic (悲しい)
潜在性の次元	severe (厳しい)	lenient (優しい)
	strong (強い)	weak (弱い)
	serious (真面目な)	humorous (愉快的な)
	masculine (男らしい)	feminine (女らしい)
活動性の次元	active (いきいきした)	passive (元気がない)
	complex (難しい)	simple (簡単な)
	excitable (激しい)	calm (落ち着いた)
	hot (温かい)	cold (冷たい)

図1. Osgood の評定尺度から選定された形容詞対

	とても	やや	も ない	ど ちら で	やや	とても	
暗い感じ	1	2	3	4	5	明るい感じ	
優しい感じ	1	2	3	4	5	きびしい感じ	
かんたんな感じ	1	2	3	4	5	むずかしい感じ	
まじめな感じ	1	2	3	4	5	ゆかいな感じ	
いきいきした感じ	1	2	3	4	5	元気がない感じ	
楽しい感じ	1	2	3	4	5	くるしい感じ	
あたたかい感じ	1	2	3	4	5	冷たい感じ	
やる気のない感じ	1	2	3	4	5	やる気のある感じ	
はげしい感じ	1	2	3	4	5	おちついた感じ	
強い感じ	1	2	3	4	5	弱い感じ	
男らしい感じ	1	2	3	4	5	女らしい感じ	
悲しい感じ	1	2	3	4	5	うれしい感じ	

図2. SD法のアンケート実施例

研究の結果と考察

1. 小学生と中学生の教科に対する好意の程度

表2. は一対比較法により得られた小学生男女の教科好意に関する標準得点と尺度値を示している。また、図3. は、各教科の間隔尺度を表したグラ

フである。表2.より特に尺度値の高い教科は、体育と家庭であった。音楽の尺度値は、他教科に比べると低い傾向であった。また尺度値の低い科目は、社会と国語であった。

表3.は中学生男女の教科に対する標準得点と尺度値を示している。また、図4.は、各教科の間隔尺度を表したグラフである。表3.より特に尺度値の高い教科は、体育と音楽であった。また尺度値の低い科目は、国語であった。

表2. 小学生男女の教科好意に関する標準得点と尺度値

	国語	算数	社会	理科	音楽	体育	図工	家庭
国語		0.176	-0.335	0.248	0.105	0.838	0.619	1.011
算数	-0.176		-0.248	0.248	-0.133	0.800	0.487	0.762
社会	0.335	0.248		0.504	0.118	1.032	0.671	0.900
理科	-0.248	-0.248	-0.504		-0.233	0.838	0.473	0.779
音楽	-0.105	0.133	-0.118	0.233		0.742	0.504	0.817
体育	-0.838	-0.800	-1.032	-0.838	-0.742		-0.519	-0.321
図画工作	-0.619	-0.487	-0.671	-0.473	-0.504	0.519		0.504
家庭	-1.011	-0.762	-0.900	-0.779	-0.817	0.321	-0.504	
平均	-0.380	-0.248	-0.544	-0.122	-0.315	0.727	0.247	0.636
尺度値	-0.538	-0.351	-0.770	-0.173	-0.446	1.028	0.350	0.899

表3. 中学生男女の教科好意に関する標準得点と尺度値

	国語	数学	社会	理科	音楽	体育	美術	技・家	英語
国語		0.246	0.246	0.553	0.522	0.684	0.402	0.402	0.300
数学	-0.246		0.055	0.246	0.342	0.490	0.121	0.204	0.013
社会	-0.246	-0.055		0.246	0.204	0.476	0.204	0.055	-0.068
理科	-0.553	-0.246	-0.246		0.068	0.358	-0.095	-0.176	-0.164
音楽	-0.522	-0.342	-0.204	-0.068		0.287	-0.246	-0.259	-0.358
体育	-0.684	-0.490	-0.476	-0.358	-0.287		-0.415	-0.415	-0.634
美術	-0.402	-0.121	-0.204	0.095	0.246	0.415		-0.148	-0.148
技術・家庭	-0.402	-0.204	-0.040	0.176	0.259	0.415	0.148		-0.055
英語	-0.300	-0.013	0.068	0.164	0.358	0.634	0.148	0.055	
平均	-0.419	-0.153	-0.100	0.132	0.214	0.470	0.033	-0.035	-0.139
尺度値	-0.593	-0.217	-0.142	0.186	0.303	0.665	0.047	-0.050	-0.197

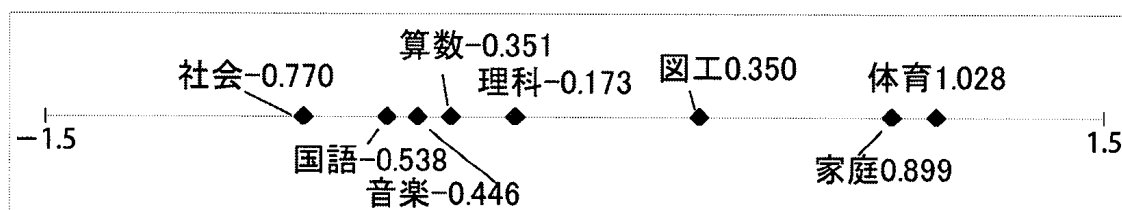


図3. 小学生男女の各教科の間隔尺度図

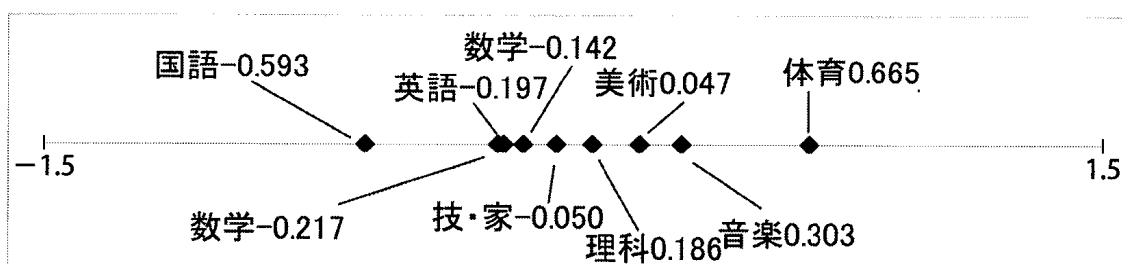


図4. 中学生男女の各教科の間隔尺度図

以上の結果から、体育は、小学生、中学生ともに最も好きな教科といえる。先行研究によると体育は、「宿題がないから」「勉強より体を動かす方が楽しいから」といった理由で好まれている¹³⁾。しかし、図4.の中学生の体育の尺度値は、小学生に比べ少し低い傾向にあった。このことから、体育への好意は、中学生になると他の教科に分化していると考えられる。この件については、別の研究を待たねばならない。

小学生の音楽の尺度値は、他教科と比べて低い傾向であった。しかし中学生の音楽の尺度値は、体育の次に高かった。このことから、音楽は、小学生から中学生にかけて好きになる生徒が増加すると考えられる。

2. 小学生の性別による教科好意の程度

表4.は小学生男子の教科に対する標準得点と尺度値を示している。また、表5.は小学生女子の教科に対する標準得点と尺度値を示している。図5.は、小学生男子と女子の尺度値を相互的に比較するため最も低い値を0に置き換えスケールを統一し、性別ごとに図式化したものである。

表4.より小学生男子において特に尺度値の高い教科は、体育と家庭であ

った。また尺度値の最も低い教科は、音楽であった。

表5. より小学生女子において特に尺度値の高い教科は、家庭と体育であった。また尺度値の最も低い科目は、社会であった。

表4. 小学生男子の教科に対する標準得点と尺度値

	国語	算数	社会	理科	音楽	体育	図工	家庭
国語		0.502	0.013	0.565	-0.095	1.019	0.736	1.170
算数	-0.502		-0.264	0.292	-0.631	0.889	0.321	0.533
社会	-0.013	0.264		0.470	-0.321	1.067	0.470	0.700
理科	-0.565	-0.292	-0.470		-0.849	0.810	0.321	0.440
音楽	0.095	0.631	0.321	0.849		1.170	0.700	0.974
体育	-1.019	-0.889	-1.067	-0.810	-1.170		-0.772	-0.810
図画工作	-0.736	-0.321	-0.470	-0.321	-0.700	0.772		0.292
家庭	-1.170	-0.533	-0.700	-0.440	-0.974	0.810	-0.292	
平均	-0.558	-0.091	-0.377	0.087	-0.677	0.934	0.212	0.471
尺度値	-0.790	-0.129	-0.533	0.122	-0.958	1.321	0.300	0.667

表5. 小学生女子の教科に対する標準得点と尺度値

	国語	算数	社会	理科	音楽	体育	図工	家庭
国語		-0.143	-0.749	-0.058	0.319	0.674	0.504	0.867
算数	0.143		-0.230	0.202	0.348	0.710	0.674	1.045
社会	0.749	0.230		0.539	0.604	0.999	0.908	1.150
理科	0.058	-0.202	-0.539		0.319	0.867	0.640	1.270
音楽	-0.319	-0.348	-0.604	-0.319		0.410	0.319	0.674
体育	-0.674	-0.710	-0.999	-0.867	-0.410		-0.290	0.113
図画工作	-0.504	-0.674	-0.908	-0.640	-0.319	0.290		0.749
家庭	-0.867	-1.045	-1.150	0.867	-0.674	-0.113	-0.749	
平均	-0.202	-0.413	-0.740	-0.039	0.027	0.548	0.287	0.838
尺度値	-0.286	-0.584	-1.046	-0.056	0.038	0.775	0.405	1.186

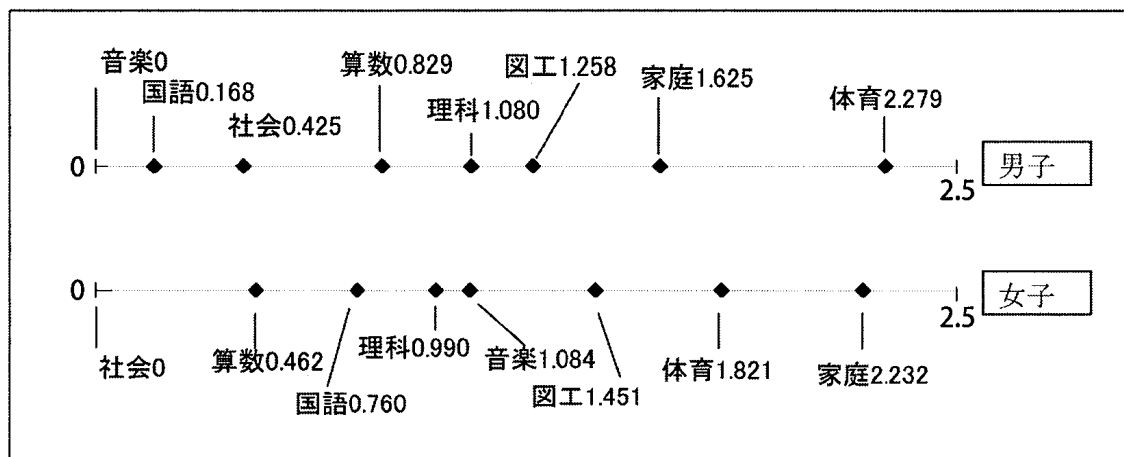


図5. 小学生性別の教科に対する間隔尺度

以上の結果から、体育は、男女ともに好きな教科といえる。さらに性別ごとに詳しくみると、男子の体育の尺度値は、他教科と比べて顕著に高かった。すなわち体育は、多くの男子児童にとって最も好まれている教科であるといえる。また女子では家庭の尺度値が最も高く、体育は2番目であった。さらに図5.から性別による体育好意を比較すると、女子より男子の値の方が高かった。これらから体育の好きな児童は、女子に比べて男子の方が多く、性別により若干の好意差があると考えられる。

男子の音楽の尺度値は、他教科と比べて最も低かった。これらから男子では音楽が最も嫌いな教科といえる。しかし女子の音楽の尺度値は、他教科と比べて中間の値であった。さらに図5.から性別による音楽好意を比較すると、男子より女子の値の方が顕著に高かった。すなわち音楽の好きな児童は、男子に比べて女子の方が多くといえる。このことから音楽は、性別により大きな好意差があると考えられる。

3. 中学生の性別による教科好意の程度

表6.は中学生男子の教科に対する標準得点と尺度値を示している。また、表7.は中学生女子の教科に対する標準得点と尺度値を示している。図6.は、中学生男子と女子の尺度値で最も低い値を0に置き換えスケールを統一し、

性別ごとに図式化したものである。

表6. より中学生男子において特に尺度値の高い教科は、体育と理科であった。また尺度値の最も低い教科は、国語であった。

表7. より小学生女子において特に尺度値の高い教科は、音楽、体育であった。また尺度値の最も低い科目は、社会であった。

表6. 中学生男子の教科に対する標準得点と尺度値

	国語	数学	社会	理科	音楽	保体	美術	術・家	英語
国語		0.513	0.674	1.126	0.164	0.745	0.248	0.421	0.451
数学	-0.513		0.136	0.391	-0.136	0.361	-0.192	0.028	-0.108
社会	-0.674	-0.136		0.192	-0.391	0.391	-0.305	-0.332	-0.421
理科	-1.126	-0.391	-0.192		-0.607	0.248	-0.745	-0.607	-0.513
音楽	-0.164	0.136	0.391	0.607		0.640	-0.133	0.083	0.055
保体	-0.745	-0.361	-0.391	-0.248	-0.640		-0.674	-0.545	-0.640
美術	-0.248	0.192	0.305	0.745	0.083	0.674		0.083	0.055
技・家	-0.421	-0.028	0.332	0.607	-0.083	0.545	-0.083		-0.164
英語	-0.451	0.108	0.421	0.513	-0.055	0.640	-0.055	0.164	
平均	-0.543	0.004	0.210	0.492	-0.208	0.531	-0.243	-0.088	-0.161
尺度値	-0.768	0.006	0.296	0.695	-0.294	0.750	-0.343	-0.125	-0.227

表7. 中学生女子の教科に対する標準得点と尺度値

	国語	数学	社会	理科	音楽	保体	美術	技・家	英語
国語		0	-0.133	0.133	0.954	0.625	0.562	0.383	0.161
数学	0		-0.028	0.108	0.912	0.625	0.440	0.383	0.133
社会	0.133	0.028		0.298	0.874	0.562	0.762	0.412	0.269
理科	-0.133	-0.108	-0.298		0.762	0.470	0.499	0.215	0.161
音楽	-0.954	-0.912	-0.874	-0.762		-0.028	-0.412	-0.625	-0.834
保体	-0.625	-0.625	-0.562	-0.470	0.028		-0.187	-0.298	-0.625
美術	-0.562	-0.440	-0.762	-0.499	0.412	0.187		-0.383	-0.353
技・家	-0.383	-0.383	-0.440	-0.215	0.625	0.298	0.383		0.053
英語	-0.161	-0.133	-0.269	-0.161	0.834	0.625	0.353	-0.053	
平均	-0.336	-0.322	-0.421	-0.196	0.675	0.421	0.300	0.004	-0.129
尺度値	-0.475	-0.455	-0.595	-0.277	0.955	0.595	0.424	0.006	-0.183

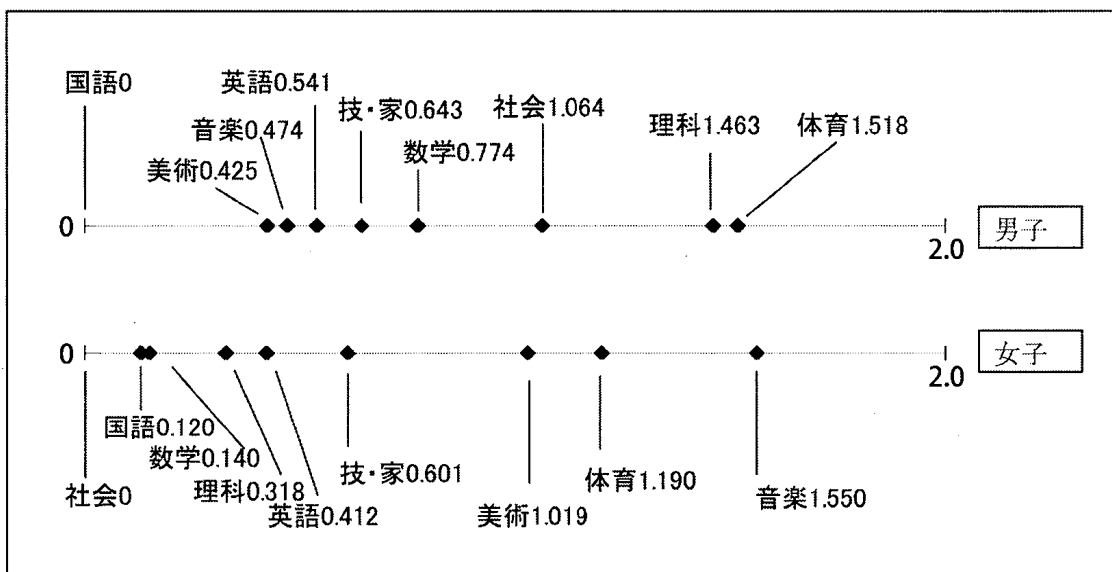


図6. 中学生性別の教科に対する間隔尺度

以上の結果から、体育は、男女ともに好きな教科といえる。さらに性別ごとに詳しくみると、男子の体育の尺度値は、他教科と比べて最も高かった。すなわちほとんどの男子生徒は、他教科と比べて体育が最も好きであった。また女子では音楽の尺度値が最も高く、体育は2番目であった。さらに図6.から性別による体育好意を比較すると、女子より男子の値の方が高かった。これらから体育の好きな生徒は、女子に比べて男子の方が多く、性別により若干の好意差があるといえる。

男子の音楽の尺度値は、他教科と比べて3番目に低かった。すなわち男子では音楽は嫌いな教科の一つといえる。しかし女子の音楽の尺度値は、他教科と比べて最も高かった。さらに図6.から性別による音楽好意を比較すると、男子より女子の値の方が顕著に高かった。これらから音楽の好きな生徒は、男子に比べて女子の方が多くといえる。このことから音楽は、性別により非常に大きな好意差があるといえる。

4. 性別による小学生と中学生の教科好意の比較

図7.は、表4.表5.表6.表7.の中で最も低い尺度値である小学生女子の社会を0に置き換え、小・中学生別、性別ごとにスケールを一定にして図

式化したものである。

これをみると、小学・中学生男子の体育の好意は、中学生男子より小学生男子の方が顕著に高かった。また小学・中学生女子の体育の好意は、中学生女子より小学生女子の方が若干高かった。しかし男子のような大きな差はみられない。全体を相対的に比較してみると体育は、小学生男子、小学生女子、中学生男子、中学生女子の順で好意が高かった。

小学・中学生男子の音楽の好意は、小学生男子より中学生男子の方が顕著に高かった。また小学・中学生女子の音楽の好意は、小学生女子より中学生女子の方が顕著に高かった。全体を相対的に比較してみると音楽は、中学生女子、小学生女子、中学生男子、小学生男子の順で好意が高かった。

これらから体育の好意は、男女とも小学生から中学生にかけて低くなり、その傾向は、男子において顕著であった。また音楽の好意は、男女とも小学生から中学生にかけて顕著に高くなり、体育と相反する傾向がみられた。

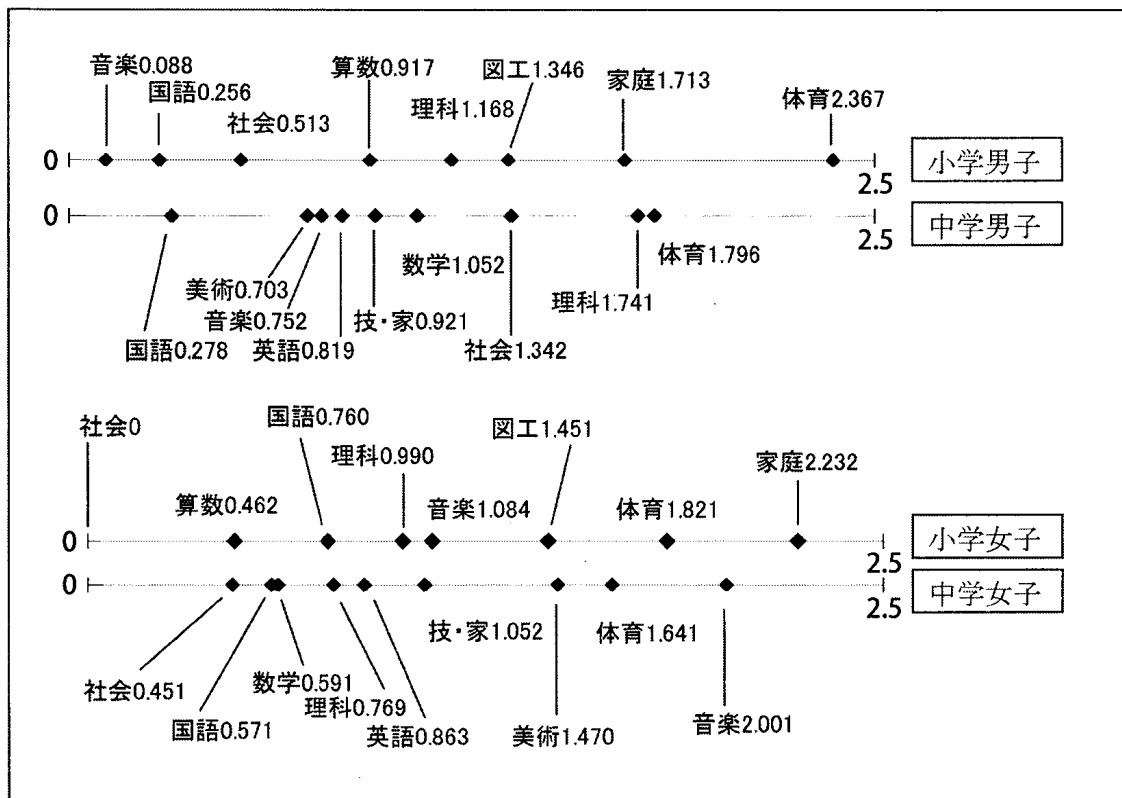


図7. 小・中学生，性別の教科に対する間隔尺度

5. 小学生の教科に対する印象の程度

表10. は SD 法により得られた各教科の評定平均値を表している。また図8. 図9. は、小学生男女の各教科に対する印象を表したグラフである。さらに図10. は、各教科の評定平均値から中央値を引き、2乗したのち2で除した値を間隔尺度として表記したグラフである。

これらの図表から体育、音楽、図工、家庭は、他教科に比べ情緒的な印象が豊かであった。特に体育は、明るい、愉快的、いきいきとした、やる気のある、激しい、強い、男らしい、嬉しいといった印象が強かった。音楽については、明るい、愉快的、落ち着いた、女らしい、嬉しいといった印象が強かった。また、体育において印象が明確でない項目は、簡単な～難しい、優しい～厳しいといった項目であった。音楽において印象が明確でない項目は、簡単な～難しい、やる気のない～やる気のある、強い～弱いといった項目であった。

また図10. から体育は、多くの項目で他の教科と比べて尺度値が高かった。このことから体育は特に情緒的な印象が強い傾向であった。

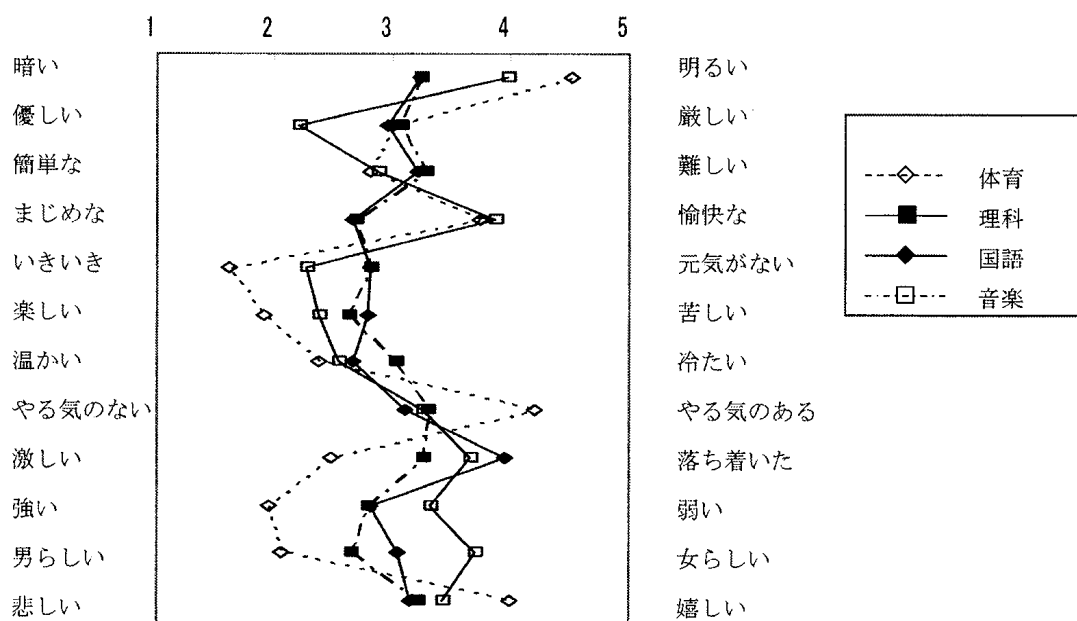


図8. 小学生における体育、理科、国語、音楽の印象

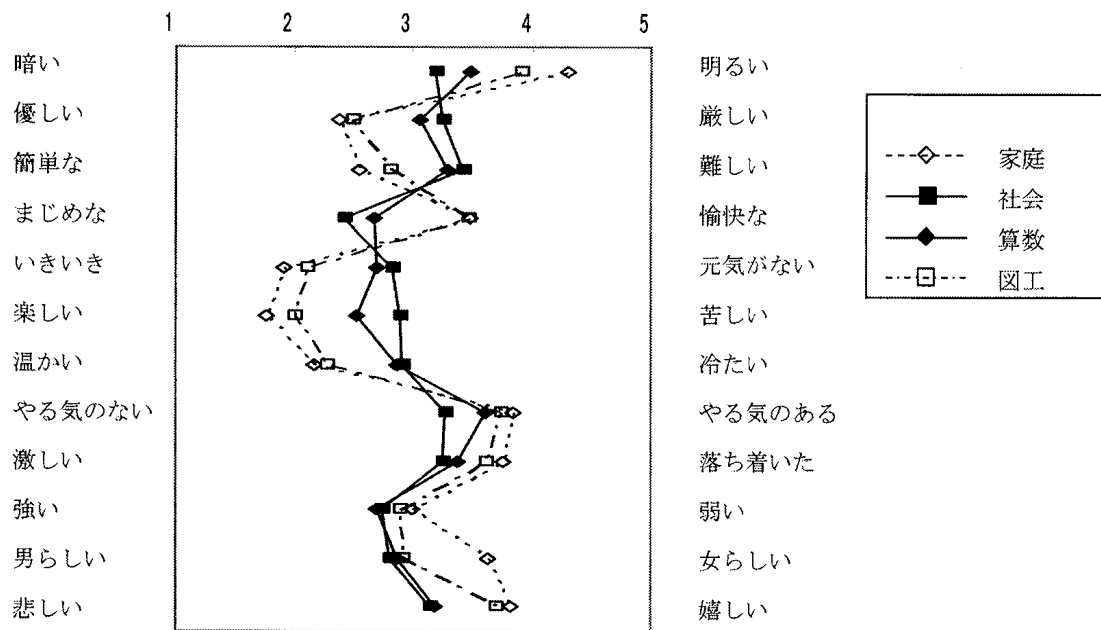


図9. 小学生における家庭、社会、算数、図工の印象

表10. 小学生における各教科の評定平均値

	国語	音楽	理科	体育	算数	社会	家庭	図工
暗い(-) — 明るい(+)	3.2 (1.00)	4.0 (1.10)	3.2 (1.21)	4.5 (0.85)	3.5 (1.01)	3.2 (1.18)	4.3 (0.96)	3.9 (1.21)
優しい(-) — 厳しい(+)	3.0 (1.04)	2.2 (1.13)	3.1 (1.16)	3.0 (1.33)	3.1 (0.99)	3.2 (1.02)	2.4 (1.23)	2.5 (1.17)
簡単な(-) — 難しい(+)	3.2 (1.07)	2.9 (1.32)	3.3 (1.19)	2.8 (1.30)	3.3 (1.12)	3.4 (1.15)	2.6 (1.13)	2.8 (1.29)
まじめな(-) — 愉快的(+)	2.7 (1.21)	3.9 (1.15)	2.7 (1.18)	3.7 (1.39)	2.7 (1.13)	2.4 (0.97)	3.5 (1.19)	3.5 (1.33)
いきいきした(-) — 元気がない(+)	2.8 (1.12)	2.3 (1.25)	2.8 (1.19)	1.6 (0.97)	2.7 (1.00)	2.8 (0.96)	1.9 (0.82)	2.1 (1.05)
楽しい(-) — 苦しい(+)	2.8 (1.17)	2.4 (1.16)	2.6 (1.15)	1.9 (1.27)	2.5 (0.95)	2.9 (1.08)	1.8 (0.94)	2.0 (1.03)
温かい(-) — 冷たい(+)	2.7 (1.18)	2.5 (1.09)	3.0 (1.08)	2.4 (1.17)	2.9 (1.04)	2.9 (0.94)	2.2 (0.90)	2.3 (0.98)
やる気のない(-) — やる気のある(+)	3.1 (1.28)	3.3 (1.19)	3.3 (1.20)	4.2 (1.15)	3.6 (1.19)	3.3 (1.27)	3.8 (1.04)	3.7 (1.13)
激しい(-) — 落ち着いた(+)	3.9 (1.07)	3.7 (1.09)	3.2 (1.03)	2.5 (1.36)	3.4 (0.94)	3.2 (1.01)	3.8 (0.98)	3.6 (1.07)
強い(-) — 弱い(+)	2.8 (0.83)	3.3 (0.95)	2.8 (0.87)	2.0 (1.12)	2.7 (0.72)	2.7 (0.91)	3.0 (0.87)	2.9 (1.06)
男らしい(-) — 女らしい(+)	3.0 (0.89)	3.7 (1.02)	2.7 (0.84)	2.1 (0.99)	2.9 (0.81)	2.8 (0.91)	3.6 (1.06)	2.9 (0.95)
悲しい(-) — 嬉しい(+)	3.2 (0.96)	3.4 (1.09)	3.2 (1.07)	4.0 (1.10)	3.2 (0.78)	3.1 (0.90)	3.8 (0.85)	3.7 (1.01)

() 内は標準偏差を示している。

(+) は評定値が高くなるよう設定した形容詞である。

(-) は評定値が低くなるよう設定した形容詞である。

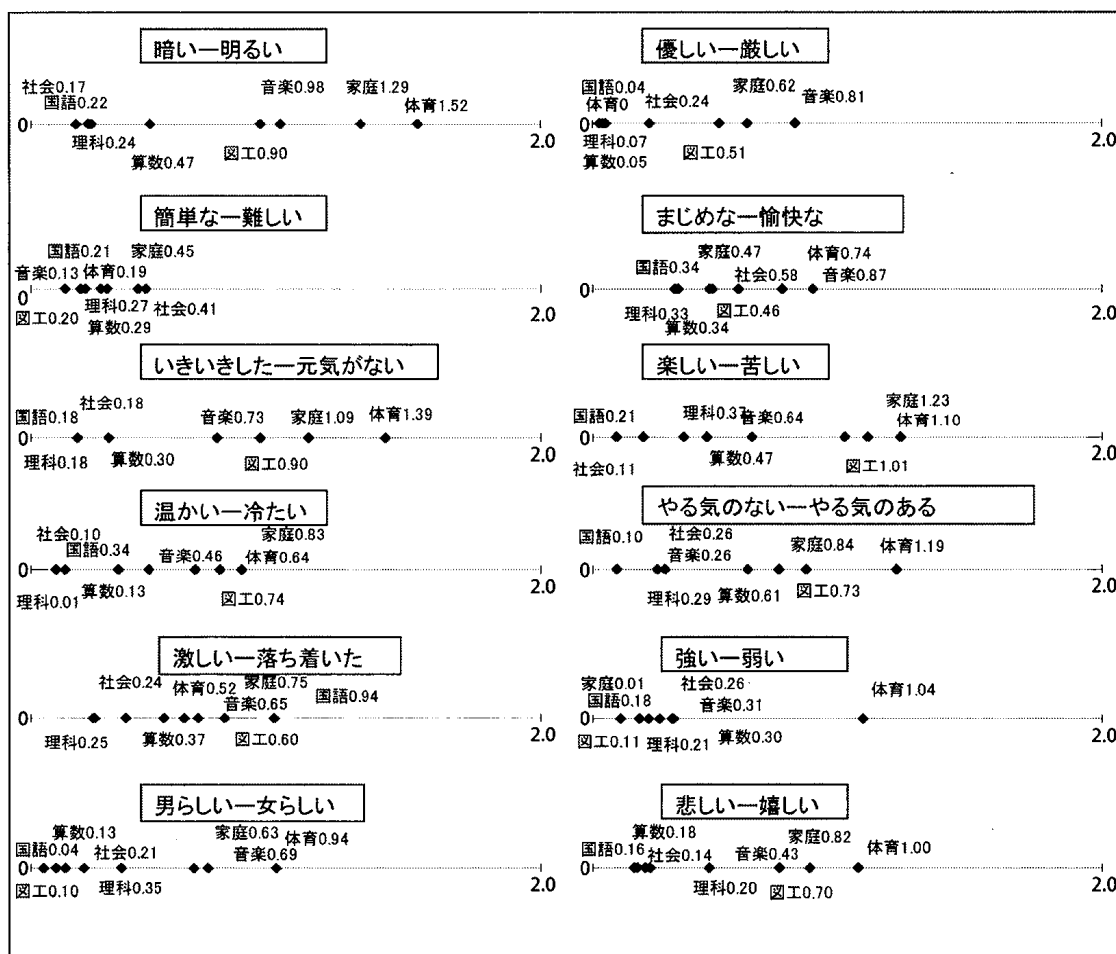


図10. 小学生における各教科印象の間隔尺度

以上の結果から、体育と音楽は、情緒的な印象が豊かであり、肯定的な印象であった。また、体育と音楽は、男らしい、女らしいといったジェンダーに関する印象も強いことがわかった。

6. 中学生の教科に対する印象の程度

表11. はSD法により得られた各教科の評定平均値を表している。また、図11., 図12. は、中学生男女の教科に対する印象を表したグラフである。さらに図13. は、各教科の評定平均値から中央値を引き、2乗したのち2で除した値を間隔尺度として表記したグラフである。

これらの図表から体育と音楽、図工、家庭は他教科に比べ情緒的な印象が豊かであることがわかった。特に体育については、明るい、愉快的、いきい

きとした、温かい、やる気のある、激しい、強い、男らしい、嬉しいといった印象が強かった。音楽については、明るい、優しい愉快な、いきいきとした、温かい、女らしい、嬉しいといった印象が強かった。また、体育において印象が明確でない項目は、簡単な～難しい、優しい～厳しい、激しい～落ち着いたといった項目であった。音楽において印象が明確でない項目は、簡

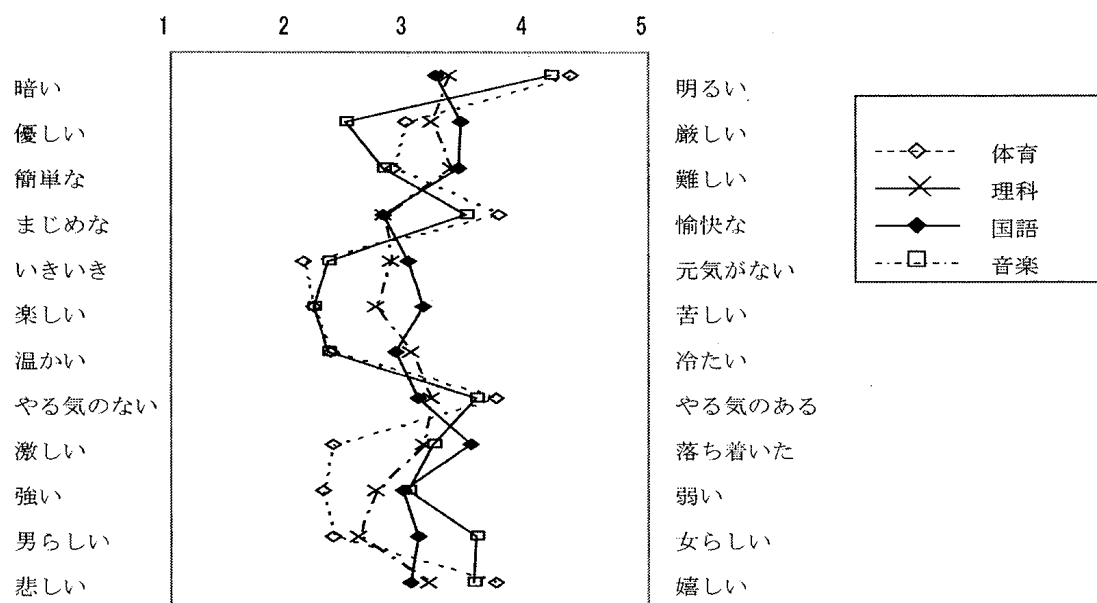


図11. 中学生における保健体育、理科、国語、音楽の印象

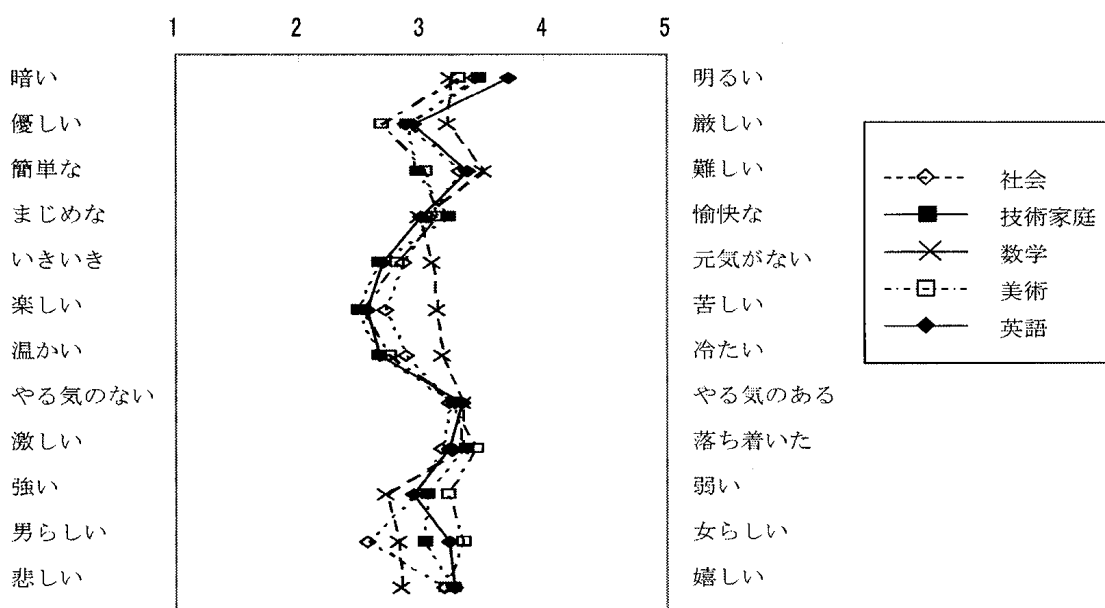


図12. 中学生における社会、技術家庭、数学、美術、英語の印象

表11. 中学生における各教科の評定平均値

	国語	音楽	理科	体育	英語	数学	社会	美術	技・家
暗い(-) — 明るい(+)	3.2 (0.95)	4.2 (0.83)	3.3 (0.95)	4.4 (0.75)	3.7 (0.98)	3.2 (1.02)	3.4 (1.27)	3.3 (1.11)	3.5 (0.92)
優しい(-) — 厳しい(+)	3.4 (0.86)	2.5 (0.97)	3.2 (0.83)	3.0 (1.25)	2.9 (0.98)	3.2 (1.08)	2.9 (1.02)	2.7 (0.99)	2.9 (0.94)
簡単な(-) — 難しい(+)	3.4 (0.92)	2.8 (0.98)	3.3 (0.92)	2.9 (1.08)	3.4 (1.12)	3.5 (1.07)	3.3 (1.17)	3.0 (0.92)	3.0 (0.93)
まじめな(-) — 愉快的(+)	2.8 (1.12)	3.5 (0.89)	2.8 (0.99)	3.7 (1.04)	3.0 (1.10)	3.0 (1.05)	3.1 (1.17)	3.1 (0.97)	3.2 (0.95)
いきいきした(-) — 元気がない(+)	3.0 (0.99)	2.3 (1.01)	2.8 (0.81)	2.1 (1.27)	2.7 (0.99)	3.1 (1.04)	2.9 (1.05)	2.8 (1.01)	2.6 (0.77)
楽しい(-) — 苦しい(+)	3.1 (1.02)	2.2 (1.04)	2.7 (0.97)	2.2 (1.27)	2.6 (1.04)	3.1 (1.11)	2.7 (1.19)	2.5 (1.01)	2.5 (0.96)
温かい(-) — 冷たい(+)	2.9 (1.00)	2.3 (0.83)	3.0 (0.88)	2.3 (1.04)	2.7 (0.92)	3.2 (1.01)	2.9 (0.96)	2.7 (0.88)	2.6 (0.83)
やる気のない(-) — やる気のある(+)	3.1 (0.99)	3.6 (0.82)	3.2 (0.94)	3.7 (1.14)	3.3 (0.94)	3.3 (1.04)	3.2 (1.08)	3.3 (0.82)	3.3 (0.92)
激しい(-) — 落ち着いた(+)	3.5 (0.98)	3.2 (0.88)	3.1 (0.84)	2.4 (1.07)	3.2 (0.83)	3.3 (1.01)	3.2 (0.94)	3.4 (0.96)	3.4 (0.84)
強い(-) — 弱い(+)	2.9 (0.76)	3.0 (0.63)	2.7 (0.71)	2.3 (0.95)	2.9 (0.70)	2.7 (0.81)	2.9 (0.88)	3.2 (0.77)	3.0 (0.78)
男らしい(-) — 女らしい(+)	3.1 (0.70)	3.6 (0.89)	2.6 (0.71)	2.4 (0.85)	3.2 (0.64)	2.8 (0.66)	2.6 (0.78)	3.3 (0.78)	3.0 (0.61)
悲しい(-) — 嬉しい(+)	3.0 (0.64)	3.5 (0.82)	3.2 (0.72)	3.7 (0.93)	3.3 (0.70)	2.8 (0.86)	3.2 (1.00)	3.2 (0.72)	3.3 (0.76)

() 内は標準偏差を示している。

(+) は評定値が高くなるよう設定した形容詞である。

(-) は評定値が低くなるよう設定した形容詞である。

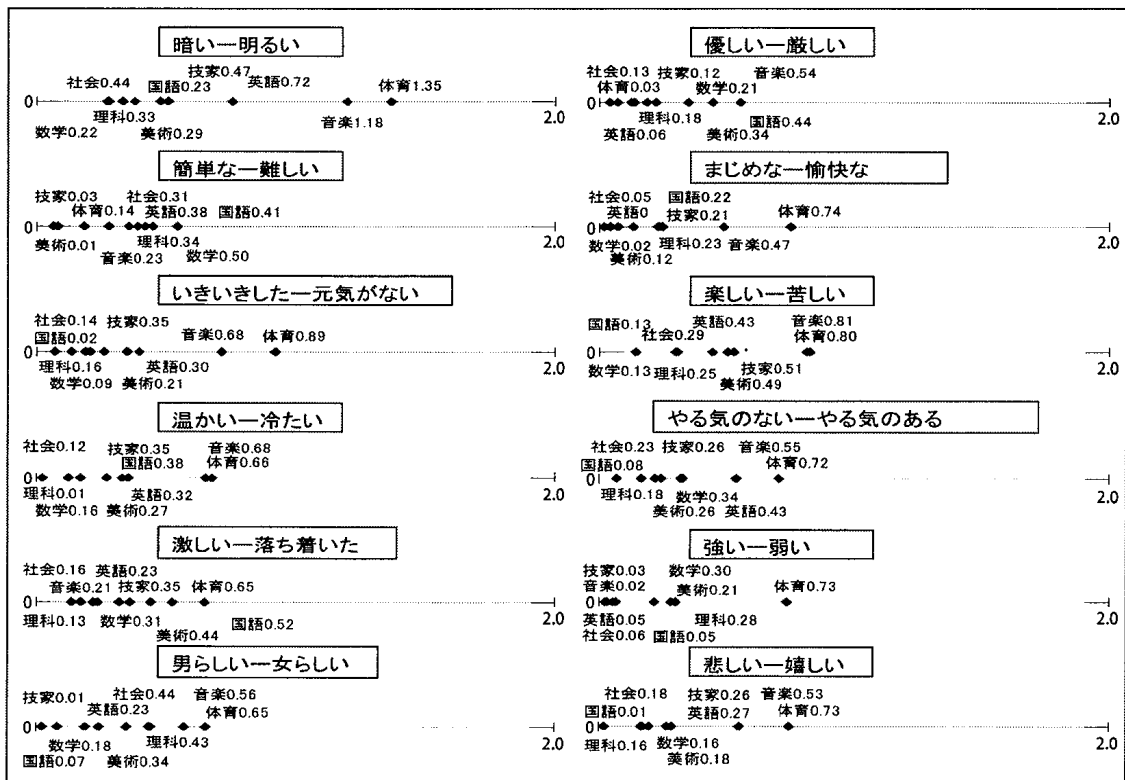


図13. 中学生における各教科印象の間隔尺度

単な～難しい, 強い～弱いといった項目であった。

また, 図13. から体育と音楽は, 多くの項目で他の教科と比べて尺度値が高かった。このことから体育と音楽は, 特に情緒的な印象が強い傾向である。

以上の結果から, 体育と音楽は, 情緒的な印象が豊かであり, 肯定的な印象であった。また, 体育と音楽は, 男らしい, 女らしいといったジェンダーに関する印象も強いことがわかった。

研究の要約と総括

本研究は, 小学5年生と中学2年生を対象に音楽と体育の好意や印象の程度を他の教科と比較して検討した。その結果, 体育の好意は, 小学生, 中学生ともに最も高かった。しかし, 中学生の体育の好意は, 小学生に比べ若干低い傾向にあった。また小学生の音楽の好意は, 他教科と比べて低い傾向であった。しかし中学生の音楽の好意は, 体育の次に高かった。

性別に分けて比較すると小学校の体育の好意は, 男女ともに高い傾向であった。さらに小学生男子の体育の好意は, 他教科と比べて顕著に高かった。しかし, 小学生女子においては, 体育より家庭の好意が高かった。また小学生男子の音楽の好意は, 他教科と比べて最も低かった。小学生女子の音楽の好意は, 他教科と比べて中間の順位であった。さらに中学校の体育の好意は, 男女ともに最も高かった。さらに中学生女子の体育の好意は, 他教科と比べて顕著に高かった。また中学生男子の音楽の好意は, 他教科と比べて低い傾向であった。中学生女子においては, 体育より音楽の好意が高かった。これらから体育と音楽の好意は, 性別により差がみられる傾向であった。

小・中学性別, 性別で相対的に比較した体育の好意は, 男女とも小学生から中学生にかけて低くなり, その傾向は, 男子において顕著であった。また音楽の好意は, 男女とも小学生から中学生にかけて顕著に高くなり, 体育と相反する傾向がみられた。

小学生の体育の印象については, 明るい, 愉快的, いきいきとした, やる気のある, 激しい, 強い, 男らしい, 嬉しいといった印象が強かった。小学

生の音楽の印象については、明るい、愉快的、落ち着いた、女らしい、嬉しいといった印象が強かった。中学生の体育の印象については、明るい、愉快的、いきいきとした、温かい、やる気のある、激しい、強い、男らしい、嬉しいといった印象が強かった。中学生の音楽の印象については、明るい、優しい、愉快的、いきいきとした、温かい、女らしい、嬉しいといった印象が強かった。これらから体育と音楽は、情緒的で肯定的な印象が強く、ジェンダーに関する印象も強いことがわかった。

【引用・参考文献】

- 1) 谷口 高士 音楽と感情 北大路書房 pp 2-5 2003
- 2) 橋本 勲ほか 新エスカ運動生理学同文書院 pp 146-172 1987
- 3) 日野原 重明 音楽療法入門上理論編 pp 4-10 2007
- 4) 松田 雅仁 児童の算数に対する意識調査 日本数学教育学会 1998
- 5) Benesse 教育研究開発センター 第4回学習基本調査報告書(小学生板) pp 98-99 2006
- 6) Benesse 教育研究開発センター 第4回学習基本調査報告書(中学生板) pp 122-123 2006
- 7) Benesse 教育研究開発センター 第3回学習基本調査報告書(小学生板) pp 16-17 2001
- 8) 野波健彦・石井信生 小学生の教科に対するイメージについての研究 pp91-101 広島女子大学家政学部紀要 28 1992
- 9) 難波邦雄他 中学校の教科等に対するイメージに関する研究(その1) pp83-104 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇20 1988
- 10) 日科技連官能検査委員会 官能検査ハンドブック pp 日科技連出版社 1973
- 11) 天坂格郎・長沢伸也 官能評価の基礎と応用 pp146-203 日本規格協会 2000
- 12) Osgood,C.E.,Suci,G.J.,and Tannenbaum,P.H., The Measurement of

Meaning, Urbana :Univ. of Illinois Press, pp53-61 1957

13) (株)バンダイ バンダイ子どもアンケートレポート vol.126 pp 4 2006